

<今月の1枚> アナログゲーム・クラブ



生涯学習総合情報誌
オアシス通信
【'23.5.1発行】vol.329

直接の体験が心に響く

ある小学校の教員だったころ「わくわく森探検クラブ」を担当していました。鳥や植物に詳しい講師と一緒に、月に1～2回、子どもたちを連れて学校の裏山を探検していました。お気に入りの葉っぱを集めて遊んだり、谷地を開拓して生き物を見られるようにしたり、木の根元から湧き出すきれいな水をフキの葉で作ったコップで飲んでみたり。校舎のすぐ近くにありながら普段は立ち入らない場所で、ワクワクするような体験がたくさんできました。子どもたちは毎回大興奮で、虫刺されや服の汚れなんて気にも留めない様子。大人たちはそんな子どもたちの姿を微笑みながら見守っていました。

砂川市公民館のエレベーターには小さな液晶モニターが付いていて、柔らかな音楽とともに美しい溪流の様子が映し出されます。気分は森探検クラブの引率中——優しい音を立てる川の水はキーンと冷たく、木々の間からは風が土のにおいを運んでくるんだ。気持ち良いだろうな——うっとりしたのもつかの間、無情にもドアは開き、現実に戻されます。

もちろん、モニターからはにおいも温度も水の音も伝わりません。私がそれらを感じた気がしたのは、本物の森の中に何度も入った経験があるからです。

2月に行われたワカサギ釣り体験では、魚が針に掛かると「(竿が) ピクッと動いた!」、釣り上げた魚が泳ぐ姿に「かわいい!」と喜ぶ子どもたちのつぶやきが聞こえてきました。また、国際交流ふれあい事業で外国の方と一緒にクッキーを作った時には「おいしすぎて、のどつまりしちゃったよ!」「今度、家でまた作るんだ!」と口々に教えてくれました。物事に直接触れ、五感を使って受け止める体験が、子どもたちの豊かな感性を刺激したことが分かります。もし、スマホ等の画面を通してのリモート学習だったら、これらの言葉は生まれたでしょうか。

今後、感染症を理由とした事業の中止は減っていくでしょう。また、マスクの着用が個人判断となり、友達や地域の人々の表情や温もりをより感じられるようになるでしょう。この3年間に子どもたちができなかった体験を補うささやかなお手伝いを、社会教育を通してさせていただきたいと思っています。

(社会教育主事 斎藤 佳太)